

「寒」「冷」「涼」による二字漢字表記語の考察

Two-character Kanji compounds with “Kan”, “Rei” and “Ryō”

蔡 欣吟
淡江大学

要旨

本稿では、低温の感覚を表す漢字「寒」「冷」「涼」によって構成される二字漢語表記語を通時的に調査・分析した。その結果、まず、順序が相反する漢字による二字漢字表記語は、異なる成立過程を有しており、使用状況もさまざまである。また、低温感覚を表現する漢字のうち、熟語を構成する際に、構成要素になりやすいものもあれば、なりにくいものもある。そして、漢字表記語は、それが漢語なのか和語なのかによって、表現する語彙や状況が異なることがあることが明らかになった。

キーワード：

低温、感覚、漢字表記語、漢語、和語

「寒」「冷」「涼」による二字漢字表記語の考察

蔡 欣吟
淡江大学

1. はじめに

現代日本語では、低温の感覚を表す形容詞「寒い」と「冷たい」はそれぞれの系統をなし、使い分けが見られる。この2語の使い分けに関して、語彙研究の面からさまざまな分類や規定が行われている¹が、教育の現場では、「接触感覚」の有無で説明されている。それは、初級の学習者にとってわかりやすいからであろう。そして、中上級に進むのにつれ、「寒冷」のような漢語語彙をも習得するようになる。漢字一文字一文字に、それぞれの意味・用法を持つ漢字が組み合わせあって、一つの熟語として用いられる場合、その熟語はどのような意味合いになるのか、また、個々の漢字とどのようなつながりがあるのか、興味深いところである。『大辞林』で「寒冷」の語義を確認してみると、「冷たく寒いこと。冷寒」²とある。この語積から、「寒冷」は和語形容詞「寒い」と「冷たい」を包摂することがわかる。さらに、「冷寒」の項には、「冷たく寒い。寒冷」とある。これらの語義を見る限り、「寒冷—冷寒」は同語義であることになろう。字順が相反する漢語語彙について、漢字二文字によって構成される漢字表記語のペアは、意味が一致しないものもあれば、また、意味上、同義であるとしても、使用の場面や使用頻度が異なるものもある、と指摘されている³。つまり、厳密な意味で、同義語はきわめて少ないのである。本稿は、温度の感覚を表す語彙の全体像を描くことを目指し、その一部として、低温の感覚を表す漢字「寒」「冷」「涼」によって構成される二字漢語表記語を通時的に考察する。これにより、これらの語彙はどのような使用傾向を呈しているのか、相違点があればそれは何なのか、を見出すことを試みる。

本稿では「漢字表記語」という用語を使用するが、この用語について簡単に説明しておく。田島(1998)は、「漢字表記語」を次のように定義している⁴。

¹ 蔡(2016)では、現代語における「さむい」と「つめたい」に関する先行研究を以下のように整理している。「国広哲弥(1967)では、「さむい」は脳での感覚で、体全部の感覚として感じるのに対して、「つめたい」は皮膚感覚で体一部の感覚として感じるとしている。渡辺実(1970)は「さむい」は接触感覚がなく、「つめたい」は接触感覚があるといった、接触感覚の有無によって規定している。森田良行(1979)は「さむい」は全体が不快を覚える状態であるのに対して、「つめたい」は体の表面で感じる温度感覚、神経的な刺激に対する感覚であるとしている。細川英雄(1986)では、「さむい」と「つめたい」は感覚主の状態なのか、対象の状態なのかによって使い分けの基準がなされる。」

² 大辞林(三省堂)

³ 田島(1985)

⁴ 田島(1998)、p.4

「漢字表記語」とは、文字どおり漢字で表記された(される)語のことである。(中略)漢語でも和語でも外来語でもとにかく漢字で表記された語のことであり、平仮名や片仮名で表記されるよりも漢字で表記されることが一般的な語のことを指す。その漢字表記がその語にとって特定のものであるかどうかは問わない。

すなわち、田島氏による「漢字表記語」は、語種に関係なく、漢字によって構成されている語彙を指している。本研究は語彙の使用を通時的に考察するが、使用する資料の性質により、漢字のみで示されているものがある。二字の漢字による漢字連結を扱うにあたって、該当語彙が漢語か和語かということは、語彙選出の基準とせず、むしろ考察の一部とする。よって、研究者の間で「漢字語」、「漢字表記語」の定義について異なることがあると認めたくえ、田島(1998)で定義されている「漢字表記語」という用語を用い、「漢字で表記されている」語を取り扱う。

2. 先行研究

現代日本語における二字漢字について、共時的に調査を行なっている研究は本多(2015)がある。本多(2015)では、二字漢語と、それを構成する漢字の意味との結びつきについて考察している。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)の高頻度語を、結びつき方によって3分類し、国語辞典の語義に基づき、分析した結果、「語と漢字の意味が2字とも結びつく語」の比率がもっとも高いことが明らかになっている。しかし、量的調査に偏っており、個々の意味的特徴については触れられていない。

字順が相反する語彙に関する調査は、調査資料を明治時代に設定する共時的な研究が多い。その理由について、荒川(1997)や田島(1998)では、幕末期から明治開化期にかけて、洋書の翻訳作業がさかんに進められ、それに応じて造語が工夫されていた結果、漢字を反転させ、用いることが多く見られるようになったからだ、と言及されている。王(2013)では、明治初期の漢語辞典、新聞と訳書より二字漢語を取り出し、字順転倒語の存続と意味変化について調査・分析している。5種の構成形式のうち、同義的・類義的な結合のタイプがもっとも多いが、その片方が消滅した比率も高い。それは、「字順が転倒しても意味が変わらない」ため、「語の競合」が進み、片方が消滅したからである、と述べられている。この結論によると、「寒冷—冷寒」のペアはどちらかが消滅することが予想されるが、現代日本語においては、この2語が並存している。

田島(1998)では、漢字表記語に注目し、漢字の機能及び漢字連結の機能について調査・分析を行ない、明治時代に焦点をおき、漢字表記語の様相を明らかにした。しかし、著者自身が述べているように、なぜ「同じ意味を表す字順の相反する二字漢語が存在するのか」という問題が残り、「一組一組の語史を調査し、それらが現在に至るのにどのような変遷を辿ってきたのかを考察する必要がある」⁵という問題点が残っている。このことから、特定の時代や分野における語彙を共時的に考察している先行研究とは異なる視点で、特定の語彙について通時的な変遷を調査する必要がある。

3. 調査対象および調査資料

本研究は、低温の感覚を表す漢字「寒」「冷」「涼」によって構成された二字漢字表記語を調査対象として通時的に考察する。3つの漢字で二字漢語を組み合わせる場合、以下のペアが考えられる。

表1 漢字組み合わせ表

		後漢字		
		寒	冷	涼
前漢字	寒	寒寒	寒冷	寒涼
	冷	冷寒	冷冷	冷涼
	涼	涼寒	涼冷	涼涼

本稿では、「寒冷—冷寒」、「寒涼—涼寒」、「冷涼—涼冷」と「寒寒、冷冷、涼涼」(繰り返し記号「々」を使用する語を含む)、と4つのグループに分け、考察を進める。

前出の語の使用を網羅的に収集するために、以下のコーパスやデータベースを利用する。各コーパスの詳細は、本稿の末尾に掲載する。

- ① ジャパンナレッジ版新編日本古典文学全集(以下、『古典文学全集』)
- ② 古記録フルテキストデータベース(以下、『古記録』)
- ③ 古文書フルテキストデータベース(以下、『古文書』)
- ④ 奈良時代古文書フルテキストデータベース(以下、『奈良時代古文書』)
- ⑤ 平安遺文フルテキストデータベース(以下、『平安遺文』)
- ⑥ デジタル和英語林集成(以下、『和英語林集成』)
- ⑦ 日本語歴史コーパス明治・大正編(以下、『近代語コーパス』)

⁵ 田島(1998)、p. 333

①は古代から近松・西鶴などの近世文学までの作品を網羅している。これを用いて近世までの使用状況を見る。②～⑤はそれぞれの時代における古文書類が収集されているものである。⑥は米国人宣教医ジェームス・カーティス・ヘボンにより編纂された日本最初の和英辞典である。初版は1867(慶応3)年、第2版は1872(明治5)年、第3版は1886(明治19)年に出版された。第2版と第3版には大幅な増補改訂が行われ、文明開化期の語彙の有様が見出し語に反映されているとされる。そして、⑦は明治・大正時代の日本語を研究するために構築されたコーパスで、『太陽コーパス』『近代女性雑誌コーパス』『明六雑誌コーパス』『国民之友コーパス』などの雑誌データがある。これらのコーパスを用い、上述の語彙を時代順に考察する。なお、以下用例を提示する際、以上の番号を用いてコーパスを示す。

4. 考察

4.1 「寒冷—冷寒」

まず、「寒冷」について見る。「寒冷」は『古典文学全集』において使用が見当たらない。古文書類では、平安時代の漢詩文集『本朝文粹』に1例見られる。

(1) 獨倦冬官之寒冷、未慣春天之妍和(『本朝文粹』・『⑤』)

この例において、「寒冷」が「気候の寒さ」の意味で用いられる。名詞として機能しており、文脈上、「飽きて、あぐむ」の対象語になることが考えられる。

近世資料には、「寒冷」の用例が8例ほど見られ、いずれも「時候が寒い(ごろ)」の意味で、時候の挨拶の場面で用いられることが多い。その統語的機能を見てみると、(2)(3)は後続の名詞を修飾や限定する用法で、(4)(5)は「寒さ」が主語となり、用いられる。

(2) 寒冷趣、折々は火事も御座候(『浅野家文書』・『③』)

(3) 寒冷之節御安泰被成御座、目出被思召候(『広橋兼胤公武御用日記』・『②』)

(4) 一書得御意候、寒冷相増申候處、(『井伊家史料』・『③』)

(5) 寒冷相募申候處、(『井伊家史料』・『③』)

『和英語林集成』でヘボン式ローマ字で「kanrei」を検索すると、初版から立項されており、「寒くひややか」に相当する意味で扱われていることが見られる。『和英語林集成』では、「寒冷」が現代語の「寒い、冷たい」の意味を包摂する語として取り上げられていると考えられる。

(6) KAN-REI, カンレイ, 寒冷(*samuku hiyayaka*), Cold and chilly(『⑥』)

『近代語コーパス』では、「寒冷」が多く見られ、60例の使用がある。この時期では、漢語である「寒冷」が漢詩や武家文書に限らず、一般的な語彙として用いられるようになったことがうかがえる。

- (7) 新公使が三月の間にマキンよりネワに赴きたる長途は、實に寒冷と難路とに苦しみたり。(『太陽』・『⑦』)
- (8) 其區域は通して寒冷を感ずること恰も降雨の部位の襲來と共に一般に天氣の陰惡を來す(『太陽』・『⑦』)
- (9) 高層氣流の寒冷の爲め。包含せし水蒸氣の大部分を放出し(『太陽』・『⑦』)
- (10) 鶏舎は空氣の流通のよいことは必要ですけれど、直接に寒冷の外氣の入るのはよろしくありません。(『婦人俱樂部』・『⑦』)
- (11) 其淡泊なること水の如く、其寒冷なること氷の如し(『国民之友』・『⑦』)
- (12) 北氷及び南氷洋の寒冷な水は、酸素を取つて底の方から赤道に流れ、(『太陽』・『⑦』)

(7)(8)は従來の意味を受け継ぎ用いられ、「寒いこと」「寒さ」を意味している。また、この時期には、前の時期と異なる意味用法の使用例も見られる。「寒冷」の対象語を観察すると、(9)(10)は高層氣流、外氣、(11)(12)は氷、水である。この4例は和語形容詞で表現すると、「冷たい」が用いられると考えられる。これらの使用から、「寒冷」の語義は「寒い」から「冷たい」に拡張していることが推測される。意味の拡張とともに、統語的機能も増えている。名詞のみならず、「寒冷な水」という形容動詞の用法も生じている。さらに、「寒冷」は主体の感覺から、感覺の対象を表現するように派生している。語構成の面から見ると、以下の(13)は「乾燥」という並列関係の修飾語と結合し、一つの名詞として用いられている。以下の(14)の「寒冷貯藏室」は、現在の冷蔵庫に近いものと思われるが、この語は明治時代における造語への工夫を代表する例であろう。

- (13) 又、冬期には寒冷乾燥なるを以て、反對に其減少を呈して居る(『太陽』・『⑦』)
- (14) 其装置に於て一層精巧にして、完全なる電氣燈装置に加へ寒冷貯藏室、(『太陽』・『⑦』)

以上、「寒冷」の近代までの使用を一覧した。

次に、「冷寒」について見る。『古典文学全集』において、「寒冷」は使用が見当たらないのに対して、「冷寒」という文字列では1例のみ見られる。『風土記』における使用で、以下の(15)である。『風土記』は変体漢文と万葉仮名で記されているものであるが、調査資料では訓下し本文が付されている。

- (15) 汝所_レ居山、生涯之極、冬夏雪霜、冷寒重襲、人民不_レ登、汝が居むる山は、生涯の極み、冬も夏も雪ふり霜おきて、冷寒さ重襲り、人民登らず、(『常陸国風土記』・『①』)

「寒」「冷」「涼」による二字漢字表記語の考察

訓下し文では、原文の「冷寒重襲」に当たる部分が「冷寒さ重襲り」とされ、「冷寒」さは「さむ」さと読みがつけられている。「冷寒」は上代では「気候の寒さ」の意味で用いられていることが考えられる。なお、今回の調査では、「寒冷」は上代における使用がないため、「冷寒」と相違があるのか、確認できない。

古文書類では、(16)の使用がある。

(16) 以肱巾井綿、能勒腹腰、必令温和、勿使冷寒(『類聚符宣抄』・『⑤』)

この例は、737年から1093年において作成された文書『類聚符宣抄』で、赤班瘡という疫病にかかった場合、注意すべき点として挙げられる内容の一つである。ここの「冷寒」は前文の「温和」と並列関係をなして、「(体が)冷える」ことを意味すると考えられる。これは、「寒冷」には見られない意味である。近代語資料『和英語林集成』では、「寒冷」は初版から立項されているのに対し、「冷寒」は第3版から見出し語として挙げられており、(17)がその例である。

(17) REIKAN, レイカン, 冷寒 (*tsumetasa*), Cool, cold; -no jikō, cold weather (『⑥』第3版)

「冷たさ」に相当する意味合いの語とされる。特に注目するところは、この項目では、「-no jikō」と記され、「冷寒—の時候」となり得ることと、それが「cold weather」のことであると明記されている。今回の調査では「冷寒」の使用例が少なく、また、近代までの資料において、「寒冷」と意味が近似している使用は『常陸国風土記』での1例のみである。同じ近代資料では、1888年出版の雑誌『国民之友』では「冷寒」は以下の(18)のような例が1例見られる。

(18) 夫れ譯の難きは冷寒なる死躰を寫すにあらざして、躍如たる精神を寫すに在り(『国民之友』・『⑦』)

この例では、「冷寒」は「死躰」を修飾しており、現代語では「冷たい」で表現されると考えられる。「冷寒」の用例はこの1例のみで、「気候」を表現する使用例は見当たらない。『和英語林集成』第3版が刊行される1886年ごろの資料をさらに調査し、明治期において「冷寒」が「寒冷」と同義になっているのかを調べる必要がある。

以上のように、現代語の国語辞典で、「寒冷」と「冷寒」は同義語のように記されているが、通時的な変遷を見れば、「寒冷」は使用例が大幅に「冷寒」を上回り、また意味用法が多いことが確認できた。

4.2 「寒涼—涼寒」

次に、「寒」と「涼」の組み合わせによる漢字表記語について考察する。前節の「寒冷—冷寒」は2語とも使用例、および意味用法が数多くあるのに対して、「寒涼—涼寒」の組み合わせは、「涼寒」の使用例がなく、「寒涼」が1例のみ見られるのである。

- (19) 誤つて、陰虚火動と為して、寒涼降火の薬を用ゐるときは、声啞喉痛し、上喘下泄の変症、(『武道伝来記』・『①』)

(19)は近世資料『武道伝来記』で使用されているものである。前後の文を併せて見ると、「寒涼」は医学用語として用いられ、「体を冷やす(薬)」のことを意味している言葉と考えられる。医学用語ではあるものの、近代語資料『和英語林集成』では立項されていない⁶。現代語では、東洋医学や漢方で「寒涼性」という言い方があるが、特定の分野のみで使用される語彙であり、汎用性がないと考えられる。

4.3 「冷涼—涼冷」

前節の「寒涼—涼寒」の使用が少ないのと同様に、「冷涼—涼冷」も同じ傾向を示している。「涼冷」の使用がなく、「冷涼」は(20)の1例のみである。

- (20) 茄子よりも一層な冷涼氣候に耐へて美果を生じます(『婦人倶楽部』・『⑦』)

「寒涼」は近世に使用があり、医学用語として用いられているのに対して、「冷涼」は近代雑誌資料で用いられている。この例では、「冷涼」は氣候を形容している。現代語では、「涼しい」は「寒い」に近い用法を持ち、ある場所にいる時の感覚を表現することが多い。「涼」が「冷」と結びつく漢語は、用例が少ないものの、氣候を表現していることが興味深い。

4.4 「寒寒—冷冷—涼涼」(「寒々—冷々—涼々」)

この節では、同じ漢字を重ねた「寒寒—冷冷—涼涼」(繰り返し記号を使用する「寒々—冷々—涼々」を含む)について見る。今回の調査ではこの三つの語彙のうち、使用例があるのは「冷冷」のみで、「寒寒」「涼涼」は使用がない。以下、「冷冷」の使用状況を便宜上、繰り返し記号の使用があるかどうかという形態上の相違によって分けて観察する。

⁶ 『和英語林集成』では、「涼」について、開音「リヤウ」とローマ字「RIYŌ」で表記されている。例えば、「涼風」は、「リヤウフウ」と「RIYŌ-FŪ」で示されている。よって、「涼」についてはローマ字「RIYŌ」で検索した。

まず、形態上、繰り返し記号を用いない、漢字二文字を使用する表現について見る。古文書類では『本朝文粹』に、『古典文学全集』では『和漢朗詠集』に1例ずつ見られる。2例とも平安時代の漢詩集における使用である。

- (21) 泠泠兮驚曉夢、青雉之尾拋扇者也。(『本朝文粹』・『⑤』)
- (22) 第三第四絃泠泠 夜鶴憶子籠中鳴
第三第四の絃は泠泠たり 夜の鶴子を憶つて籠の中に鳴く(『和漢朗詠集』・『①』)

(21)は文脈から見ると、「泠泠」は「天氣が寒い」か「冷たい風」のために、という解釈が可能である。(22)の「泠泠」について、その頭注では「さらさら流れる水音」を形容する語だと注が付されている。この例は『和漢朗詠集』に見られるものであるが、その原文は白居易の手になる『五弦彈一惡鄭之奪雅也』である。原文にあたってみると、(22)の文は「第三第四絃泠泠」に該当する。中国語では、「泠」⁷は水がさらさらと流れるような、せせらぎの音という意味であり、そこから転じて、清らかで微かな音を形容することになる。(22)の「泠泠」は「泠泠」の誤用で、水音を形容する意味を持ち、用いられていることが考えられる。

次に、繰り返し記号を用いる「冷々」について見る。今回の調査では、「冷々」の読みは、中世資料では(23)「れいれい」と(24)「りやうりやう」、近世資料では(25)「れいれい」と(26)「ひやひや」と、それぞれ二通り見られる。(23)は前述した(22)と同様に、中国詩の誤用によるものである。(24)は現代仮名遣いで示すと「りょうりょう」となり、岩(原文では「巖」)を形容する表現である。近世の資料でも、「冷々」を用い、岩を形容するものが見られる。それが以下の(25)である。また、(26)のように風を形容する場合にも使用されているが、ここでは「ひやひや」と読み、和語として使用されていることがわかる。

- (23) 第三、第四の絃は^{れいれい}冷々たり。夜の鶴子を憶うて籠の中に鳴く。(『太平記』・『①』)
- (24) また、千町ヶ嶽といふ所を見るに、峨々たる磐石、半天雲を引き、^{りやうりやう}冷々たる巖、蒼々として道もなし。(『室町物語草子集』・『①』)
- (25) 泉石^{れいれい}冷々たる納涼の地は、ことに湿気をうけて、夜もねられず、(『近世俳文集』・『①』)
- (26) 上総山は晴れても武蔵の方は曇り、江戸の方から吹く風^{ひやひや}冷々として、(『近世随想集』・『①』)

⁷ 中国語のピンインでは、「泠」は「líng」と発音する。

近代語資料における使用について、『和英語林集成』では立項されていない。『近代語コーパス』では、「冷々」の振り仮名は「れいれい」「ひやひや」「ひやびや」「ひえびえ」の4種類ある。「れいれい」は(27)～(29)の使用例があるが、前の時期に「巖」を形容していたのに対して、(27)～(29)は態度が冷淡で、よそよそしい様子を形容する表現である。また、(29)は「淡々」と結びつき、四字熟語を構成している。これらの使用から、「れいれい」は前の時代より意味用法が拡大していることが考えられる。

- (27) 斯る明らけき誠とをよそにして、敢て好んで冷々として理窟をのみ辨ぜんとはするぞ(『女学雑誌』・『⑦』)
- (28) 而して、彼等は大率ね冷々たることを止めざりし也。(『女学雑誌』・『⑦』)
- (29) 井戸端で會ふて、互に主人の噂する位の冷々淡々に比すれば、これだけは、上方の方其情厚しといふべし(『太陽』・『⑦』)

一方、『近代語コーパス』における「ひやひや」「ひやびや」「ひえびえ」などの和語の使用例は、(30)～(32)である。和語の使用例は、冷たい風やそれによる様子を形容する表現として用いられていることがわかる。

- (30) ^{ひやひや}冷々した朝風に吹れますのが何とも言へぬ好い心持で、生々とした血が全身に漲るやうに感じるので御座います。(『女学世界』・『⑦』)
- (31) 石の勾欄に身を靠せて、秋の意の^{ひやびや}冷々と沁る時、貴女は神祕な、幽遠な、深く邃かに透き徹つた美しい眼、(『女学世界』・『⑦』)
- (32) 戸外の空気はさすがに^{ひえびえ}冷々と流れ込むで來た。(『太陽』・『⑦』)

近代語資料において「冷々」は、漢語として用いられる場合は、冷たい態度、和語の場合は、冷たい風をそれぞれ表している傾向がある。

5. まとめ

本稿では、低温の感覚を表す漢字「寒」「冷」「涼」によって構成される二字漢字表記語について、通時的な観点で上代から近代までの使用を考察した。その結果、全体における特徴として、以下のことが明らかになった。

- ① 「寒冷—冷寒」は、現代語の辞書では同義語とされているが、歴史的に見れば、「寒冷」は、用例が多く、意味用法も「冷寒」より豊富である。
- ② 「涼」を構成要素とした漢語の用例は少なく、また、「涼」は前に位置する漢字にならない。低温感覚を表現する漢字のうち、熟語を構成する際に構成要素になりやすいものもあれば、なりにくいものもある。
- ③ 同じ漢字を重ねて二字漢字表記語を構成する低温表現では、「冷冷」のみが成立している。また、漢字表記語は、それが漢語なのか和語なのかによって、表現する語彙や状況が異なることがある。

「寒」「冷」「涼」による二字漢字表記語の考察

漢語の構成はさまざまな規則や形態が存在する。似た意味の漢字によって結合した語彙を歴史的に考察すると、現代語と異なる見方が出てくる。今後、さらにほかの温度感覚漢字の結びつきについて考察し、語彙成立の有様と過程、それに、語彙の組み合わせの傾向を明らかにしたい。

参考文献

- 荒川 清秀 (1997) 『近代日中学術用語の形成と伝播—地理学用語を中心に』 白帝社
- 蔡 欣吟 (2016) 「感覚表現「寒い」と「冷たい」の通時的考察—連体形を中心に—」『日本語の様々な姿を考える 黄憲堂教授記念論文集』 致良出版社
- 田島 優 (1985) 「字順の相反する二字漢語」『名古屋大学人文科学研究』 14号『近代漢字表記語の研究』 明治書院所収
- (1998) 『近代漢字表記語の研究』 明治書院
- 馬 雲 (2016) 「日本語の漢語が中国語で逆転する二字漢語について」
- 本多 由美子 (2015) 「二字漢語における語と漢字の意味の結びつきの特徴—国語辞典の語義の説明文を利用した調査」『第8回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 国立国語研究所
- 王 燦娟 (2013) 「字順転倒の二字漢語について」『芸術工学研究：九州大学大学院芸術工学研究院紀要』 19

調査コーパス

- ジャパンナレッジ版『新編 日本古典文学全集』 <<http://japanknowledge.com/>>
- 東京大学史料編纂所『古記録フルテキストデータベース』
- 東京大学史料編纂所『古文書フルテキストデータベース』
- 東京大学史料編纂所『奈良時代古文書フルテキストデータベース』
- 東京大学史料編纂所『平安遺文フルテキストデータベース』
- <<http://www.wap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>>
- 明治学院大学デジタルアーカイブズ『デジタル和英語林集成』
- <<http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/waei/search/>>
- 国立国語研究所『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』
- <http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html>
- 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』
- <http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/fee.html>